神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Lost home (II) : the philosophy of Kuki revisited

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小浜, 善信, Obama, Yoshinobu メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/602

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

失われた故郷（Ⅱ）
——九鬼哲学再考——

小浜善信

——承　前——

Ⅱ　原始偶然

（1）　神の存在論理学的構造

「はじめに原始偶然があった」——九鬼は，経験的次元から形而上的次元へ，いわば「下から上へ」と無窮に遡行していったその果てに，つまり経験的次元をいわば垂直の方向に超えた形而上的次元に，そのような事態を目撃することになった。いったい「原始偶然」とは何なのか。その構造はどのようなものなのか。その「原始偶然」の存在論理学的構造に関してかれに示唆を与えたのは，これも長い西洋哲学史のなかで絶えず言及されてきた「自因性」（aseitas）と「他因性」（abalietas）という思想である。（II，二三六）

自因性とは「自らによって」（a se）在ること，すなわち自らの存在根拠を自らのうちにもつことを意味し，「自己原因」（causa sui:スピノザ）とか「存在そのもの」（esse ipsum:トマス）とか，或いはまた「不動の動者」（*κινοῦν ἀκίνητον*, movens immobile: アリストテレス）とか呼ばれたもの，要するに「神」に固有の性格である。他因性とは「他者によって」（ab alio）在ること，すなわち自らの存在根拠を自らのうちにもたないことを意味し，「偶然的なもの」（contingens）とか「被造物」（creatura）とか呼ばれたもの，要するに「世界」に固有の性格である。（Ⅱ，二三六；Ⅺ，二四七－四九；Thomas, *Summa Theologiae,* I, q. 2, a.3参照）九鬼はおそら

く意識的に，自らの思想表現としては「神」という言葉の使用を避けているが，「原始偶然」は「自因性」をもつものとしてかれなりの「神」を意味していると見てよいだろう。

そしてかれはこの「原始偶然」を「形而上的絶対者」と言いかえて次のように言う。「絶対者は絶対者なるが故に絶対的に一と考えられる。また絶対的に一なるが故に絶対的に必然と思惟される。この絶対的必然を形而上的必然と呼ぶことができる」。もちろんここで言われている「必然」とは，この現実的世界におけるような因果律が適用されうる世界の次元で言われる「経験的必然」ではなく，因果律の届かない領域，むしろ因果律そのものの性格がそこで決定されるような「形而上的必然」である。こうして九鬼は絶対者を「必然—偶然—者」として性格づけて，次のように言う。「原始偶然は絶対者の中にある他在である。絶対的形而上的必然を神的実在と考え，原始偶然を世界の端初または墜落（Zufall＝Abfall）と考えることの可能性もここに起因している。絶対的必然は絶対者の静的側面であり，原始偶然は動的側面であると考えても差支えない」。（Ⅱ，二四〇）

そのような「必然—偶然」或いは「静的—動的」という存在論理学的構造をもつ絶対者・神と，他因性をその存在性格としてもつこの世界とはどのような関係にあるのか。九鬼のいう絶対者・必然者については，それを「存在の無限の可能性の充満（存在の一〇〇パーセントの可能性全体）」と解釈することができる。この可能性全体のなかの一つの可能性，九鬼自身の術語で言えば，「離接肢全体（必然者—無数の可能的世界全体）のなかの一つの離接肢（偶然者——一つの可能的世界）」が現実へ「スルリ」と偶然する（Ⅴ，「音と匂——偶然性の音と可能性の匂」，一六七参照）。その結果が，「私」の存在を含むこの現実的世界の存在（existentia）である。「偶然性とは必然性の他在である」。

「存在の無限の可能性の充満（存在の一〇〇パーセントの可能性全体）」である必然的絶対者（神）をかりに「サイコロ」にたとえるならば，この偶

然した現実世界は，ちょうど無数の「目」をもった「サイコロ」がコロコロと転がって偶然した一つの「目」のようなものである。たまたまこの「目」が出たが，他の「目」が出ることもありえたのである。「私」を含めて，この世界は無数分の一の確率で偶然したのである。離接的偶然性とは，現実にこの「目」が出ているが，しかしその必然性はなかったという，「無いことの可能」に，言いかえれば「存在と無」に関わる偶然性である。この世界と「私」の存在の偶然性は，そのような「遠い遠いところ，可能が可能のままであったところ」，つまり原始偶然に由来するそれである。そこが，この現世という「異郷」を当て所もなく漂泊する魂が自らの「故郷」（Heimat）として予感していた行方，そして『偶然性の問題』を上梓した後，晩年（三六年以降）に，「遠い遠いところ，私が生れたよりももっと遠いところ，そこではまだ可能が可能のままであったところ」（V，「音と匂——偶然性の音と可能性の匂」，一六八）と，そこに「寂しさ」ではなく，むしろ懐かしさ，郷愁さえ感じるようになったあの「失われた私の故郷」だったのである。

このように，経験的次元から形而上的次元へ，いわば「下から上へ」と無窮に遡行していったその果てに，つまり経験的次元をいわば垂直に超えたところに原始偶然を目撃することになった九鬼は，今度は反転してその「原始偶然」という始原から，いわば「上から下を」顧みてみる。形而上的な地点から形而下的な世界を俯瞰してみるのである。「必然—偶然」構造をもつ形而上的絶対者が含む可能性ないし離接肢全体という観点から見れば，辿られた因果系列は必ずしも唯一可能な因果系列であったわけではなく，無数の可能的な因果系列のうちの一つにすぎなかったはずである。他の因果系列に従ってできごとが生起し，別の因果律に従って開始し展開する世界もありえたという意味で，このわれわれの現実世界が従う因果系列ないし因果律そのものが偶然的なものである。「個物および個々の事象の存在」や個々の「二元の系列の邂逅」の偶然性（定言的および仮説的偶然性）ではなく，因果法則そのものの偶然性，或いは「個物および個々の事象の存在」や個々の「二元の

系列の邂逅」がその中で生起するこの世界の存在そのものの偶然性である。

たとえば，シーザーがルビコン河を渡らなかったような，あるいは，西郷と勝が相まみえなかったような歴史的世界もありえた（Ⅲ，「驚きの情と偶然性」参照）。「私は東京で生れた者であるが，京都で生れたことも，横浜で生れたことも可能なこととして考えられる。私の両親はいづれも日本人であるが，両親の一方が外国人で，私が混血児として生れた場合も容易に考えられる。それのみならず両親とも外国人で，アメリカ人としてニューヨークで生れた場合も，イタリア人としてローマで生れた場合も考えられる」。（Ⅱ，「偶然化の論理」［三六年以降］，三七一）要するに，偶然化（現実化）しうる世界（可能的世界）は無数にありえたのである。これも従来見過ごされてきた点であるが，九鬼最晩年の「可能的世界」という思想も重要である。「偶然性の度合は〔中略〕可能性との関係によって生じるのである」という一文もある。（Ⅲ，「驚きの情と偶然性」，一七二）必然性と偶然性との関係およびそれら両様相の存在論的意味も，「可能性」という様相をそれら両様相の媒介概念とすることによって具体性を帯びることになる。

たしかに，サイコロが振られて，たとえば「一」の目が出た場合，この「一」の目が出るということは，サイコロを振る力や，それが落ちる面などによってすでに決定されていたであろう。「一」の目が出たのは偶然ではなく必然であっただろう。サイコロが手を離れたその瞬間にどの目が出るかは決定されるのである。われわれが「一」の目が出たのは偶然であると言うのは，われわれの知的能力の有限性ないし欠陥（スピノザ）によるのであって，「一」の目を結果せしめた微細な諸原因をあますところなく知り得ないというだけである。われわれ人間には偶然と思われることも実はそうではなくて必然的に生じているのである。サイコロが振られる力やその重さ，また空気抵抗や転がる面など，そのような条件は実際にはほとんど無限にあるだろうが，そうしたいわゆる「初期条件」が決定された時点で「一」の目が出ることは必然であった。九鬼もこのことを否定しているのではない。その意味で，

「必然の相のもとに」世界を見るスピノザ哲学も一面の真理をもっている。このわれわれの現実世界の存在を前提（仮定）すれば，ものの存在，できごとすべては，このような仕方で在り，他の仕方で在るのではない原因をもっている（トマスやライプニッツの言う「仮定的必然」）。「自然のなかには何ひとつ偶然的なものは存在しない。一切は神の本性の必然性から一定の仕方で存在や作用へと決定されている」（スピノザ『倫理学』Ⅰ，命題二九）。「有の意味を同一律によって規定し，同一律に反するものを無と見做したパルメニデスの哲学［同一性・必然性の哲学］は，偶然に対する驚異に発して二元に対する脅威に終わった。しかも我々はパルメニデスの哲学に或る意味の真理を承認しない訳にゆかない。そこにまた人間の喜びと悩みとが潜んでいるのである」（Ⅺ，二八九；Ⅱ，二五五）。［傍点，引用者］

しかし，パルメニデスもスピノザも，「遠い遠いところ」，そこでは「まだ可能が可能のままであった」ところ，そこからこの現実の世界を見るという視点を欠いていた。いわば「もう一段高いところに立ってみれば」（Ⅲ，「驚きの情と偶然性」，一六一参照），つまりサイコロが手を離れる以前にまで遡行して，静的なサイコロそのものをみれば，それははじめにその力で，その場所に放られなければならないといったような必然性はなかったのである。もっと強くあるいは弱く，また別の場所に，放られることも可能であった。そうすれば別の因果系列に従って展開するような世界という「目」が出たであろう。九鬼にとっては，この世界の存在を前提（仮定）するという，まさにその前提自体が問題になっているのである。

経験的次元で「下から上へ」遡行してゆけば「必然の相のもとに」見られるこの世界も，離接肢全体（可能性全体）という形而上的次元から，いわば「上から下へ」と目を転じてみれば「偶然の相のもとに」（sub specie contingentiae）見られる。九鬼はこのことを「与えられた必然を，多くの可能性の中の一つとして偶然に過ぎないと見る」立場と言う（Ⅲ，「驚きの情と偶然性」，一六一）。経験的必然は形而上的（離接的）偶然と呼ばれてよ

い。定言的（論理的）および仮説的（経験的）偶然，つまり「個物および個々の事象の存在」の偶然，「二元の系列の邂逅」のそれも，結局この離接的（形而上的）偶然に基礎をもち，この地平に至ってはじめて，真の姿でその問題性と意味とが顕わになる。必然性が支配するこの世界を，さらにもう一段の高み，つまり形而上的次元から，偶然性の相のもとに見るこの立場は，九鬼的な「神」の立場といってよい。（以上，Ⅱ，一四九－二五〇）もちろんこのことは，われわれ人間のがわからいえば，形而上的偶然ないし原始偶然がわれわれの「脚下」にあって，その存在を絶えず脅かしているということ，われわれが「底のない」「無の深淵」の上に仮住まいしている脆く果敢ない存在だということに他ならない。

たしかに，「上から下を顧みてみる」，「形而上的次元から形而下的次元を俯瞰してみる」，「もう一段の高みからみる」などといった拙著での表現は，読者に誤解を与えかねないそれなのかもしれない。しかしそれらないしそれらに類する表現は九鬼自身が用いているものでもあり（『偶然性の問題』，「驚きの情と偶然性」等），かれが意図していたことは，われわれが日常何の不可思議もないかのように前提しているわれわれの生とこの世界の存在は，むしろ「上から下を顧みてみる」ことによって，改めてその根拠を根底から揺るがされるということであった。

われわれが日常性（Alltäglichkeit）の中に埋没し忘却してしまっているわれわれの生とこの世の存在の無根拠性は，むしろ一度この世とこの世の生を離れて見ることによってこそ徹底的にその真相を露わにする。九鬼にとって「下から上へ」とはいわば「往相」を，「上から下を」とはいわば「還相」をも意味する。九鬼は，「下から上へ」遡っていって，そこにとどまろうというのではない。かれは，徹底的にその無根拠性を露わにされたわれわれの生とこの世界の存在に立ち戻り，どこまでもここにとどまってそれを自由な生の自由な創造の場としようとするのである。言うまでもないが，九鬼は傍観者でもなければニヒリストでもない。

なお，或るシンポジウムの席で，先に触れた九鬼の「可能的世界論」について，私は，ライプニッツ研究者・酒井潔学習院大学教授から，「京都で生れ，横浜で生れたと考えられ得る私」，「両親の一方が外国人で，混血児として生れたと考えられ得る私」，「それのみならず両親とも外国人で，アメリカ人としてニューヨークで生れ，イタリア人としてローマで生れたと考えられ得る私」とは，そもそも現に「東京で生れ，両親はいずれも日本人であるような私」すなわち「九鬼周造」という固有名詞で名指しされるような個体とはまったく別の個体なのではないか，つまり九鬼のその意味での「可能的世界論」は成り立たないのではないか，そしてまた，私（小浜）自身はその可否をどのように考えるのかという質疑を受けた。九鬼のこの思想はライプニッツの「(共) 可能的世界論」批判を背景にしているのであるが，いまのところ私はその質疑に対して明確に答えることができない。クリプキの議論なども含めてさらなる検討課題としたい。

（2） 遊戯する神

森村氏やその他の評者の方々から提起された疑義に答えるために，九鬼哲学における「神」についてもう少し述べておこう。九鬼の言う「神」は，それをたとえて言えば，遊戯してサイコロを転がすようなそれと見てもよいし，あるいはそれ自体が無数の「離接肢」すなわち「可能的世界」(possibilia) という「目」をもったサイコロのようなものであると解してもよいだろう。神は，幼子がそうするように，戯れに自ら転がって現実的世界というこの「目」，この姿を見せているのである。サイコロの無数の目全体のなかの一つが出るということは，目全体がいわば裏面に隠れて，そのなかの一つが前面に現れるということである。その意味で，サイコロは自己の静的な在りかた（全体的な在りかた）を否定して動的に自己を顕示する。転がらなくてもサイコロはサイコロであるが，自らのうちに戯れへの衝動を，展開への欲求をもつ。この現実的世界はそのような神すなわち「必然—偶然—者」の一つの

現れであり，したがってこの現実的世界そのものが「必然—偶然」構造をもって存在している。この現実的世界は神の一つの現れにすぎないが，たしかに神の現れの一つなのである。

『偶然性の問題』の「偶然性とは必然性の否定（Negation）である」という冒頭句は，こうして，「偶然性と必然性とは一者（τὸ ἕν）の両面である」，あるいは「偶然性とは必然性の自己否定態である」，言いかえれば，「世界は神の自己否定による自己顕現（manifestatio sui）である」という意味であったことになる。そのことを九鬼は「偶然性とは必然性の他在（Anderssein）である」と言ったのである。九鬼の『偶然性の問題』におけるメタ形而上学（メタ存在論）は，一種の汎神論（pantheism）の様相を帯びている。この世界は至るところ戯れの顕現に満ちている。もちろん，しかし，神の自己顕現としてのこの現実世界は，どこまでも一つの顕現にすぎない。そして，ここでいう「世界は神の自己否定による自己顕現である」という意味での「汎神論」とは，むしろこの世の存在と在りようとから徹頭徹尾その理由と根拠とを廃棄してしまうようなそれなのである。なぜなら，現世は遊戯する神（梵）の自己顕現なのであり，遊戯の遊戯たるゆえんはまさに遊戯すること以外に「目的も関心も」ないところにあるのだから。「こちら側」からはむろんのこと，「向こう側」からもこの世界，この個物の存在を意図していたわけではないのである。

以上を確認したうえで，「著者（小浜）は，『遊戯する神』の視点から九鬼が自らの哲学を構築したと考えているように思われる。しかし，著者のように『遊戯する神』を持ち出さずとも，九鬼の偶然論を語ることができるし，そうする必要があると思う。九鬼哲学を解釈する際に，著者のように『神』の視点は必ずしも必要ではない」という，本稿冒頭に引いた森村氏の批評について言うならば，まず，「遊戯する神」という思想は，私の九鬼解釈として持ち出されたそれというより，九鬼が大いなる共感をもってところどころで触れているかれ自身の思想であり（Ⅲ，「驚きの情と偶然性」，一六二—六

六；XI，講義「偶然性」，二一七），それはほとんど『人間的な，あまりに人間的な』におけるニーチェを連想させるような思想であるということ，そして，森村氏のいう「『この世』の存在の無根拠性＝偶然性」はむしろその思想によって極まるということを指摘しておきたい。そうでなければ，この世とこの世の生の無根拠性はどこに，どのようにしてその真相を露見するのか。

森村氏の指摘とはまったく逆に，九鬼のいう「神」，つまり「遊戯する神」以上に「『この世』の存在」を当然のこととする前提を覆し，その「無根拠性＝偶然性」を顕わにする思想は他にないのである。とくにポンティニー講演に基づく論考「形而上学的時間」とともに九鬼最晩年の短編中の傑作「驚きの情と偶然性」（三九年）はそのことを証する論考としてもっと注目されてよい。多少長くなるが，そこから引用しておこう。ここには，簡潔にではあるが，先に触れておいた，シェリングの「原始偶然」という思想に対する批評や，輪廻・業思想の根底にある同一性・必然性の論理を徹底してゆけば結局は原始偶然に至らざるをえないという，「形而上学的時間」における九鬼の思想も改めて記されている。

> ライプニッツのほかには，特にシェリングが世界の偶然性に対する感覚を有っていた。後期のシェリングのいわゆる積極的哲学は，原理的には今日の実存哲学と同じような主張をしているものであるが，その立場に立ったシェリングは世界の始まりを原始偶然（Urzufall）によるとした。〔中略〕但しシェリングは原始偶然の象徴として，天上の楽園でエバが誘惑に負けたことや，地下のハーデスの許でペルセフォネが誘惑に負けたことなどを考えている。エバは智慧の木の実を食うことも食わないことも出来た。然るに食ってしまった。またペルセフォネは石榴の実を食うことも食わないことも出来た。然るに食ってしまった。シェリングはそれを原始偶然の象徴と考えたのであるから，そこには自由意志による選択がある。〔中略〕西洋の哲学がキリスト教の影響の下に立っている

限りは，純粋な偶然論，純粋な驚きの形而上学は出来て来ないのである。ライプニッツは「より善きものの原理」に従う決定論になってしまったし，シェリングは自由意志論を主張したに過ぎないのである。〔中略〕純粋な偶然論はキリスト教と関係のないギリシア哲学や東洋の哲学の中に見出されるのである。例えばギリシアでは，ヘラクレイトスは世界を無茶苦茶に積まれた塵芥のかたまりに譬えたり，将棋の遊戯をしている子供に譬えている。〔中略〕数論瑜伽説や吠檀多派の哲学にあっても，自足円満な梵が何故に造化するか，完全解脱の境にある自在神が何故に転変するか，という問に対して，「遊戯のみ」と答えているのは，深く味わうべき思想である。梵は自在性と無執着性とを性格としていて，何らの必然性に強要されるところがないから，偶然の遊戯をするのである。〔中略〕日常生活では単なる遊戯にも何等か僅少な目的が存しているが，梵の造化転変にはいささかの目的も見出し得ないというのである。仏教では因縁とか業とかいう観念があって，一見，偶然論に反対のようであるが，因縁なり業なりをどこまでも遡れば，結局は偶然（「原始偶然」—引用者注）に到達するよりほかないように思われる。（Ⅲ，一六二－六六）

『偶然性の問題』は，個物の存在から二元の邂逅へ，そして形而上的絶対者へと遡及した。「下から上へ」と順次高踏して遊戯する神の境域にまで到り，そこから一転「上から下を」顧みて，世界を遊戯する神の一つの現れと見る，つまり，それはそのことによって一度現世から徹頭徹尾その存在根拠・理由を奪い去り，現世のそのような無根拠性を見据えた上で，すべてをそのありのままに肯定し，そしてこの世界を自由な主体の自由な創造の場と見定めた作品である。ちなみに，『「いき」の構造』（三〇年）において，「安価なる現実の提立を無視し，実生活に大胆なる括弧を施し超然として中和の空気を吸いながら，無目的なまた無関心な自律的遊戯をして居る」（Ⅰ，二二－

二三）と言われた「いき」は，そのような「行き方」を理想とする美学，そのような「生き方」を目指す倫理・道徳であった。『偶然性の問題』に至って，その「行き方」は，「無目的なまた無関心な自律的遊戯」をする神の立場に高踏する「生き方」にほかならないことが明らかとなる。その「生き方」は，遊戯し哄笑する神に，遊戯し哄笑して応答し返す「行き方」にほかならないことが判明する。「遊戯」という思想は，九鬼の生涯一貫したテーマであった。

（3）「原始偶然」――失われた故郷

「必然―偶然」という存在論理学的構造をもつ転がる前の「サイコロ」は，無数の可能的世界という「目」をもっていた。父と母が出会うことのない，したがって「私」が存在することもない因果系列によって展開するような世界，また，父母が出会うにしても，かれらと天心とは出会うことのない，したがって父母も「私」も別の人生を歩んでいたかもしれないような因果系列によってできごとが生じる世界も可能であった。シーザーがルビコン河を渡らないような，あるいは西郷隆盛と勝海舟が江戸城で相まみえることがないような仕方で展開する歴史的世界もありえたであろう。

もちろん実際にはこの「目」が出ている。父母は出会い，「私」は生まれ，「私たち」は天心と出会った。シーザーはルビコン河を渡り，西郷と勝は相まみえた。しかし，この「目」でなければならない必然性はなかったのである。「遠い遠いところ，私が生れたよりももっと遠いところ，そこではまだ可能が可能のままであったところ」，この時間系列ないし因果系列が開始する前の可能性の世界――九鬼が晩年にひとり密かに憧憬し，郷愁を抱くようになったあの「場所」とは，そのような，無数の可能的世界という「目」をもつ「必然―偶然―者」だったのである。その「場所」は，それをもし「故郷」と言えるとすれば，一度そこを離れれば二度と帰れない，しかし，気づいたときにはもうすでに離れてしまっていた，その意味で「遠い遠い」故郷

ではあったのだが。もはや言うまでもないことであろうが，「遠い遠いところ，私が生れたよりももっと遠いところ，そこではまだ可能が可能のままであったところ」とは，この時間系列を無限に遡った遠い過去の或る時点という意味ではない。

では，なぜこのような在りようでの世界であって別の在りようでのそれではないのか。そもそも，なぜこの世界は，この個物は存在するのか。ミリンダ王やライプニッツも発し，九鬼も共有していたその問いに九鬼の立場から答えるとすれば，格別の理由はない，わけもなくこの世界は，この個物はこのような在り方で，こうして存在するのだということになろう。「こちら側」からはむろんのこと，「向こう側」からも，この世界，この個物の存在が意図されたわけではない。この世とこの世の生にただそれだけで意味があるわけでもなければ根拠（理由）があるわけでもないのである。

してみると，ハイデガーも問うていた問い（『形而上学入門』）であるが，われわれはどこから（woraus）やってきて，どこに（worauf）あり，どこへ（wozu）と去ってゆくのかと問われれば，どこからともなくやってきて，どこにあるとも知れず，どこへともなく去ってゆくとしか答えようもない，その意味で一切衆生はこの世という「異郷」を，行く雲，流れる水のように当て所もなく彷徨う「漂泊者」のようなものであろう。ヘラクレイトスの神がそうするように，あるいはまたバラモン教の「梵天」がそうするように，「遊戯する神」がサイコロを戯れに振った，その結果としてこの「目」が偶然に出たのである。この「目」が出る必然性はなかった。「自らこの世の生を選んだわけではないし，選べたわけでもない」というのはそういう意味である。別の「目」が出る可能性もあった，つまり，別の在りようでの世界，他の在りようでの生も可能であったのに，そうではなく，いま，ここに，こうしてわれわれが「在る」という厳然としたこの事実，この出来事，その意味でこの世（異郷）とこの世の生（異郷の生）そのものが一つの「運命」なのである。もちろんかれは決して「ニヒリスト」などではない。この世とこ

の世の生そのものの無根拠性＝偶然性を一度徹底して見定め，そしてそのような現世と現世の生とを一個の「運命」と見据えた上で，かれは，それを自由な創造の場（故郷）と主体とするのだと言う。現世は異郷――しかしその異郷（その都度の「いま，ここ」）をかけがえのない故郷となるよう意志せよということであろう。

最後に付言するならば，これもすでに拙著（二三八頁）で述べておいたことであるが，『偶然性の問題』は九鬼哲学の総括であると同時に，一切を「偶然性と必然性」という観点からみようとする，さらなる展開へ向けての基礎論でもあった。その意味で九鬼哲学は未完の哲学だと言ってよいであろう。とくに，九鬼哲学の観点から見るとき，社会や国家，そして人類の問題はどのように扱われるのか，それは残された問題であろう。もちろんその問題に関わる「日本的性格」という論考（三七年）があるが，和辻などと比較したときに，その方面の展開は十分であったとは言いがたいであろう。しかし，これは九鬼哲学に限ったことではないが，その継承・展開の可能性を言う前に，ひいては日本哲学の新たな展開・構築の可能性を言う前に，まずテクストそのものを精確に解読して誤読を避け，その全体像を正確に把握する必要があることは言うまでもない。

（了）

【付記】

拙著『九鬼周造の哲学――漂泊の魂』についての書評に対する私の回答は，「遊戯する神――書評に答える」という論題で『日本の哲学』第８号（「日本哲学史フォーラム」編，昭和堂，二〇〇七年）に掲載されている。ただ，それは紙幅の関係で大幅に（約⅓に）縮約されたものである。前稿「失われた故郷（Ⅰ）――九鬼哲学再考――」と本稿はその全文である。